

地域社会学会会報

No.244

2025 .3.31

地域社会学会事務局 Office of Japan Association of Regional and Community Studies
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 横浜国立大学都市科学部
齊藤麻人研究室内

TEL 045-339-3291(直) FAX 045-339-3291 郵便振替 地域社会学会 00150-2-790728
E-mail jarcs.office@gmail.com URL <http://jarcs.sakura.ne.jp/>

◆..... 〈 会報 244 号のトピック 〉◆

- 1) 2024年度の会費納入をお願いします。2023年度よりSMOOSYによるクレジットカード決済を原則としています。振込用紙の送付は行っておりませんので、サイトよりご確認をお願いします。
- 2) 2023年度地域社会学会賞が発表されました。

目 次

1. 理事会からの報告
2. 研究委員会からの報告
3. 編集委員会からの報告
4. 社会学系コンソーシアム担当からの報告
5. 第18回（2024年度）地域社会学会賞の選考経過と受賞作の発表、各講評と受賞者の言葉
6. 50周年事業委員会からの報告
7. 事務局からの報告
8. 会員異動
9. 会員の研究成果情報
10. 理事会のご案内

2025 年度大会のご案内

日時 2025年5月17日（土）～18日（日）

会場 東京経済大学国分寺キャンパス
JR中央線・国分寺駅南口から徒歩12分 国分寺駅はJR中央線の快速・特別快速とも
すべて停車します。

※会場の詳細、プログラム・報告要旨は、次号245号に掲載します。
発行は4月14日頃の予定です。

1. 理事会からの報告

2024年度地域社会学会第4回理事会は、2025年2月1日（土）の10時30分～12時15分まで東京大学本郷キャンパス（+オンライン）で行われました。出席者は以下の通りです（敬称略）。

小山弘美、齊藤麻人、阪口毅、佐藤洋子、二階堂裕子、野坂真、平井太郎、藤井和佐、町村敬志、松宮朝、三浦倫平、室井研二、望月美希、矢部拓也、山口博史

理事会では報告事項9件、審議事項3件が議論されました。

●第50回研究大会について

地域社会学会第50回大会は2025年5月17日（土）・18日（日）の両日、東京経済大学にて開催されます。

（齊藤麻人）

2. 研究委員会からの報告

2月1日（土）に2024年度第4回研究例会が東京大学本郷キャンパスにてハイブリッド形式で開催されました。富田涼都氏からは今日における社会と自然の関係の「厄介さ」について、吉原直樹会員からは50周年記念事業「地域社会学を振り返る」についてそれぞれご報告いただきました。会場とオンライン合わせて50名ほどの参加者があり、活発な質疑が行われました。当日の報告の概要については『地域社会学会ジャーナル』第20号をご覧ください。

次に、5月17日（土）～18日（日）に東京経済大学で開催予定の第50回大会のアナウンスです。自由報告には24本のエントリーがありました。大都市圏の（再）開発の動向、地方の存続可能性、都市の文化やライフスタイル、地域産業の変容や災害などテーマは多岐にわたり、両日とも3部会で準備を進めています。また、自由報告部会とは別に、50周年企画若手ワークショップの調査報告の部会も設ける予定で、例年になく盛り沢山の内容となっています。

5月18日には「環境変動適応と地域社会」をテーマとした大会シンポジウムが開催されます。今年度の研究例会の集大成をなすもので、報告者は西廣淳氏（国立環境研究所）、丸山康司氏（名古屋大学）、辻岳史会員（国立環境研究所）を予定しています。西廣淳氏は気候変動適応センター副センター長であり、この分野の研究を牽引する人物です。丸山康司氏は環境社会学の第一人者で、社会学以外の研究領域にも造詣が深い人物です。辻岳史氏には地域社会学の立場から、主に災害・防災を切り口に報告いただく予定です。討論者は若手の地域社会学者に引き受けてもらいました。望月美希氏（静岡大学）には災害研究の立場から、阪口毅氏（立教大学）には今回の企画の経緯に通じた研究委員の立場からそれぞれコメントいただく予定です。

自由報告部会・大会シンポジウム等の要旨ほか詳細については、次号の会報245号でご紹介します。多くの皆さまのご来場をお待ちしています

（室井研二）

3. 編集委員会からの報告

第5回編集委員会をメール会議で開催し、年報第37集（2025年5月刊行予定）の編集の進捗状況について話し合いました。現在、自由投稿論文については4本の掲載が決定しました。特集論文は、大会シンポジウムの登壇者に寄稿を依頼し、解題を含め計4本が掲載されます。また書評6本、書評リプライ1本が掲載される予定です。お忙しいなか、査読や執筆をお引き受けくださった皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

（松宮 朝）

4. 社会学系コンソーシアム担当からの報告

2025年3月8日に、社会学系コンソーシアム第17回シンポジウム「〈原爆〉をめぐる記憶

と継承」が、オンラインで開催されました。来年度も3月に開催される予定ですので、会報でもご案内しますが、社会学系コンソーシアムのウェブサイトなどでもご確認いただければ幸いです。また、社会学系コンソーシアムのウェブサイトは以下のURLに移行しました。

<https://jconso.jimdofree.com/>

(三浦倫平)

5. 第18回(2024年度)地域社会学会賞の選考経過と受賞作の発表、各講評と受賞者の言葉

1. 選考経過

2024年度の選考対象となった作品は、2023年6月1日から2024年5月31日までの1年間に刊行された本学会会員の著作・論文である。

第1回委員会は、オンラインにより2024年10月18日(金)に実施した。そこで、9月末日までに17名の推薦委員から推薦された作品と自薦・他薦の作品を含めて資格審査を行い、選考対象の著作を、以下のように確定した。

地域社会学会賞(個人著作部門) : 5点

地域社会学会賞(共同研究部門) : 2点

地域社会学会奨励賞(個人著作部門) : 0点

地域社会学会奨励賞(共同研究部門) : 0点

地域社会学会奨励賞(論文部門) : 0点

第2回(12月13日)、第3回(2月14日)の選考委員会において対象作品について慎重に審議し、受賞作候補を決定した。その後の理事会に報告し、受賞作が以下のように決定された。

○地域社会学会賞(個人著作部門)

受賞作なし

○地域社会学会賞(共同研究部門)

・嶋崎尚子・西城戸誠・長谷山隆博編『芦別——炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』寿郎社、2023年12月

○地域社会学会奨励賞(個人著作部門)

・廣本由香『パインと移民』神泉社、2024年3月

○地域社会学会奨励賞(共同研究部門)

受賞作なし

○地域社会学会奨励賞(論文部門)

受賞作なし

2. 今期の推薦委員

2023-24年度の推薦委員を公表いたします。記してご協力に感謝いたします。

伊藤嘉高・内田和浩・尾中文哉・木田勇輔・齊藤麻人・嶋崎尚子・武岡暢・魯ゼウオン・山本薫子

3. 受賞刊行物の講評

【地域社会学会賞(共同研究部門)】

◇嶋崎尚子・西城戸誠・長谷山隆博編『芦別——炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』寿郎社、2023年12月

本書は、北海道の「石炭産業のライフサイクル」——「多くの人びとが芦別に移り住み、石炭を掘り出し、家族ぐるみで地域に暮らし、炭鉱の終焉とともに芦別を去った」の軌跡を、「戦後を中心に〈昭和の芦別〉として記録する」ことを眼目としている。尺別、夕張、台湾など、産炭地研究会の一連の共同研究のなかに位置付けられ、本書は、その共同研究の一つの集大成として受けとめることができるものである。

丹念な聴き取り調査に加えて、三井芦別炭鉱閉山の翌年1993年に開館した「星の降る里百年記

念館」の前・館長である長谷山隆博との協業であることを特徴とする。芦別という地域社会を理解するにあたって、人口動態、「移入と定着、そして移出」に着目し、「大量な人びと」の「フットプリント」（足跡）を辿るかたちでなされている。長谷山の尽力による写真記録で全体を概観した後、【芦別の炭鉱と労働者の移入・定着・移出】（1章から5章）、【芦別における炭鉱労働】（6～8章）、【芦別の地域産業と地域活動】（9章から11章）、終章、年表という構成になっている。権太からの引き揚げ者、学校・子ども、女性たちの組織活動への目配りも特徴的である。

地域社会学会の共同研究の文脈では、夕張についての北海道大学・布施グループの共同研究以降の研究として位置づけることもできる。同研究では、「労働者」は「地域社会における組織のなかの構造それ自体」に「その地域に定住したという証」を「刻印」とした。本書は、「地域から地域へと渡りあるかされる存在」である「労働者」の経験と記憶と地域社会の形成・変成とのかかわりを、あらためて問うていると考えられる。

一連の共同研究のなかでも、とりわけ本書は、「芦別の経験と記憶の次世代への継承」という目標を達成するため、第一次資料の収集・整備、多面的な調査、地域との協業をやりきった作品となっている。以上から、地域社会学会賞（共同研究部門）の授賞に相応しい研究と判断した。

【地域社会学会奨励賞（個人著作部門）】

◇廣本由香『パインと移民』神泉社、2024年3月

本書は、沖縄県石垣島において台湾からの移民たちが担ったパイナップル（パイン）産業をめぐる植民地化と土着化の過程を明らかにした研究である。著者はパイン生産農家で実際に働きながら参与観察を重ね、歴史的統計的な資料なども広く渉猟しつつ、その歴史的な経緯とその過程で移民たちが徐々に獲得していく社会的承認による植民地化から土着化への展開を綿密に追求している。

台湾からの移民が日本の敗戦によって無権利状態に置かれ、排斥を受ける中で、条件不利な土壌でも育ちうるパイン生産のノウハウを頼りに、あえて周辺的な地域への移住を受け入れ、加工用原料としてのパイン生産という植民地的な状況から、やがて生果としての美味しいパインの開発による地域資源としての中心性を獲得していく過程を、土着化のプロセスとして理論化している。歴史的統計的な文書資料だけでなく、何人かの代表的な人物の生活史の聞き取りなども含めて、全体を立体的に描き出すことに成功している。フィールドワーク、島嶼研究、地域研究、モノ研究など複数のアプローチを組み込んだ「生活環境史」（生活史と地域の環境史）の試みと評価できるだろう。

結論として、土地の価値転換、匿名性から固有性への転換、周辺から中心への転換という植民地化から土着化に至る3つの転換と地域資源論への社会的承認という視点の導入などへの言及が見られるが、力強いモノグラフから導き出した知見が若干総花的で迫りに欠ける点や、移民の集落だけではなく石垣島という地域への言及がもう少しほしかった点など、いくつかの課題は残るとはいえ、地域社会学会の奨励賞（個人著作部門）の受賞に相応しい内容であると判断した。

4. 受賞者の言葉

○地域社会学会賞（共同研究部門）

嶋崎尚子（早稲田大学）

西城戸誠（早稲田大学）

この度は、嶋崎尚子・西城戸誠・長谷山隆博編『芦別——炭鉱〈ヤマ〉とマチの社会史』に、地域社会学会賞（共同研究部門）を授与していただき、誠にありがとうございます。

本書は、博物館学芸員と社会学者による、文字通りの共同・協働研究の結晶です。私ども産炭地研究会（中澤秀雄会員、新藤慶会員、笠原良太、坂田勝彦、島西智輝、清水拓）は、芦別市星の降る里百年記念館前館長、長谷山隆博さんとの連携のもと、道央空知に位置する芦別市を対象に、1992年に閉山した三井芦別炭鉱に焦点を当てた地域史研究を重ね、その成果を本書にまとめました。本書を通じて、芦別が産炭地から地方都市へと変貌を遂げる過程を、実証的に示すことができたと自負しております。

本書の特筆すべき点は、第一に、芦別市星の降る里百年記念館の豊富な収蔵資料を基盤としていくことです。同館の資料群は、他に類を見ない、まさに唯一無二の「地域博物館」と言えま

す。この資料群を築き上げたのは、長谷山さんその人です。考古学を専門とする長谷山さんは、記念館の開設にあたり、「芦別の全てを知る者」となることを決意し、その言葉を現実のものとなりました。残念なことに、昨年2月、長谷山さんはご逝去されました。本賞の受賞を長谷山さんにご報告できたことを、心より嬉しく思うと同時に、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

第二に、地域史としての価値です。本書は学術書であると同時に、芦別の記録集としての側面も持ち合わせています。特に、冒頭に収録した「写真記録 昭和の芦別」は、長谷山さんによる詳細な解説が添えられた100枚の写真で構成され、秀逸な写真集としての完成度を誇ります。それは、芦別に移り住み、生活し、そして去っていった、数多くの人々の「懐かしいアルバム」でもあるのです。また、本書は北海道の出版社である寿郎社から刊行されました。同社の多大なご尽力により、大判 (B5) で、かつ「芦別」の文字が力強く配された、非常に印象的な装丁が実現しました。この点においても、協働の成果を実感しております。寿郎社は、このたび第21回出版権会新聞社学芸文化賞を受賞されました。

最後に、この望外な受賞に学会賞選考委員会と理事会の皆様、そして本研究にご理解とご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

○地域社会学会奨励賞（個人著作部門）

廣本由香（福島大学）

この度は、拙著『パインと移民——沖縄・石垣島のパイナップルをめぐる「植民地化」と「土着化」のモノグラフ』を地域社会学会奨励賞にお選びくださり、ありがとうございます。たいへん光栄に思いますし、今後の研究の励みにもなります。これまでご指導くださった先生方、選考してくださった委員のみなさま、調査に協力してくださったフィールドの方々には御礼申し上げます。

私は、パイン生産者のもとでアルバイトとして働きながらフィールド調査を続けました。フィールドに身を置くことで、パイン生産に励んだ台湾系移民と県内移民の歴史、生産地域の環境、そしてパイン生産を継いだ移民二世の実践的な取り組みに着目し、島嶼の地域経済を支えたパイン産業史や生活史を発達させてきたプロセスに迫っています。それは社会の中で「周辺化」「他者化」されてきた移民一世と二世の生産者が、厳しい環境と差別と闘いながらパイン生産を通して地域社会の中で居場所を築き、社会的承認を得てきた「土着化」の歩みでもありました。

従来の沖縄研究では「沖縄-日本」といった単線的な関係の中で構造や事象を捉える傾向にありましたが、それに対して本研究は「沖縄-日本」だけでなく「沖縄-台湾」「沖縄-先島」「市内-裏石垣」という重層的な関係や文脈の中で捉える視点や、これまで沖縄近現代史や沖縄内部の共同体から排除されてきた人びとに目を向けたことが特徴です。私自身、地域社会の中で「周辺化」「他者化」された人びとの経験や実践に光を当てた生活史を記述する必要性や、その記録自体が社会的承認を広げる手助けとなり、地域文化の確立につながると考えてきたからです。今回の受賞も、移民一世と二世の生産者が歩んできたこれまでの軌跡が認められ、社会的承認が得られたという一つの証だと思い、たいへん嬉しく思います。

6. 50周年事業委員会からの報告

●地域社会学会 50周年記念事業「若手会員の地域調査・研究ワークショップ」

2025年度第2回全体研究会を3月14日に東洋大学で対面にて行いました。昨年2月に研究フィールドを淡路島と日立市決定し、「企業城下町」といわれる都市の転換や今日における大企業と地域の関わりといったところに焦点を当てることになりました。その後淡路島班、日立班と2手に分かれて、およそ1年間調査を行ってきた結果を報告し合いました。この結果については、成果報告を行う部会を設定していただきましたので、5月の大会にてご報告いたしますので、ご参加いただければ幸いです。

メンバー21人が集まり、「若手会員の地域調査・研究ワークショップ」をおよそ1年半かけて行ってきました。最初は緊張していたメンバーも、一緒に調査に行くうちにだいぶ打ち解けてきました。周りに地域社会学（あるいは社会学そのもの）を学んでいる人が少ないと言っていた大学院生も多かったのですが、気軽に議論ができるようになりました。成果は何よりもそこにあったように思います。このような機会を設けていただきありがとうございます。

（小山 弘美・佐藤 洋子・前島 訓子）

7. 事務局からの報告

(1) 会費納入状況

2025年2月1日時点の会員は391名（一般342名、学生・院生29名、終身20名）で、2024年度の会費納入率は約40%でした。

(2) 会報242号・ジャーナルNo.18の発行

庶務担当理事から学会HP上で会報243号とジャーナルNo.19の発行が報告されました。

(3) 会費納入のお願い

2024年度の会費納付率が低いことについて、会費納入がSMOOSYに移管されたことに伴い、それまで年報送付時に同封されていた振込用紙がなくなったことなどが影響しているとの指摘を受け、今後は未納者への財務担当理事からの督促を増やしたり、HP上でSMOOSYでの納付方法について周知するなどの対策を講じていきます。**引き続き会費納入にご協力をお願いします。**

(4) 会員の研究成果情報の提供のお願い

2023年以降の研究成果に関する情報を募集しています。用紙（地域社会学会WEBサイトからダウンロードできます）の情報を、事務局宛のメールでお送りください。ご協力よろしく申し上げます。万一、情報を提供したのに掲載されていないなどの手違いがございましたら、事務局まで御一報くださいますようお願いいたします。

(齊藤麻人)

8. 会員異動

<新入会員>

三田絵里香（北海道大学大学院）：人口減少下の北海道における生活支援の地域比較

宮本義直（横浜国立大学大学院）：都市社会学理論の政策形成過程における適用

栗原美紀（共愛学園前橋国際大学）：地域社会における対話と身体実践

(以上、2025年2月1日理事会で承認)

<退会会員>

小池亮介

9. 会員の研究成果情報(2023~2024年度)

なし

10. 理事会のご案内

第5回理事会

日時 5月11日(日) 午前11時~

場所 オンライン